

『 禅のこころ -曹洞宗- 』

とうざんぜんじ
洞山禅師

令和2年6月第4週放送

曹洞宗という宗派の名前にその一字が使われ、中国曹洞宗の祖とも称せられている洞山禅師は正式には洞山良价とうざんりょうかいといます。中国、唐の時代に今の浙江省せつこうしょう紹興市しょうこうしにお生まれになり、七歳で出家なさいました。

僅か二日で「般若心経」を覚え、更に「無眼耳鼻舌身意」むげんにびぜつしんいという「般若心経」の一節の意味について師匠に質問をしたと伝えられています。自分には眼も耳も鼻も有るのに何故「般若心経」では無いというのか、「空」という大乘仏教の根本に幼いながら気付くところがある、優れた知性を持っていたのです。そして五台山ごたいさんで受戒し、正式な僧侶となった後に十二歳から諸国を行脚し、多くの禅の師匠を訪ねて教えを受け、修行を続けました。

その中で洞山禅師は南陽慧忠なんようえちゆう禅師という師匠が説いた、いわゆる「無情説むじょうせつ法ぼう」、つまり生命を持たない、人や動物でもない自然界にある様々な物が、人と同じ様に仏の真理を説いているということについて学び修行をしていました。中々答えが見つからないあるとき、潭州たんしゆうという所で谷川を渡っている際に、自らの影が水面に映るのを見て気づくことがあり、洞山禅師は大笑いし、大いなる悟りを得たとされています。ずっと考えていたことが突然解った時はとても嬉しいものです。

その時の言葉は、後に洞山禅師が著された「宝鏡三昧」ほうきようざんまいというお経の中に・
・「汝なんじ、是れ渠こに非かれず、渠あら、正かれに是れ汝まさ」と示されており、水面に映る姿は自分そのもののようであって、決して自分ではない、しかしその姿が直接捉えることの出来ない自分自身の真実の有り様を示している、という深い教えです。

『 禅のこころ -曹洞宗- 』

これは「洞山過水」という禅語や禅画になっていて、掛軸などにその場面が残されています。

この「宝鏡三昧」というお経は修行道場は勿論、一般寺院においても毎朝のお勤めの中で歴代のお祖師様方、お寺のご開山様、歴代住職様のご供養としてお誦みしております。歴代住職の法要でも誦まれるお経です。

洞山禅師は六十三歳で亡くなられる際にも伝説が残されています。その時が近いとお察しになると頭を剃り衣に着替え、弟子に鐘を打たせて修行僧を集め、坐禅のお姿で静かになりました。それを見て皆が大声で嘆き涙したところ、洞山禅師は目を開いて困ったものだと言った修行僧を叱りつけ、それから八日間説法をして亡くなったとされています。

遠い昔のお祖師様でありながら、その教えは、お経や伝説などで身近に耳にしている禅師さまでもあります。教えの道筋の尊さに思いを致したいものです。

— 終 —